

日本旧石器学会
ニュースレター 第23号
JPRA NEWS LETTER No.23
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION

国際使用痕会議 “Use-Wear 2012/ Faro, Portugal”

岩瀬 椎（日本学術振興会特別研究員（PD）・明治大学黒耀石研究センター）

2012年10月10日～12日の3日間にかけてポルトガルのファーロ（Faro）で、使用痕に関する国際会議が開かれた。日本からは筆者と佐野勝宏会員、山岡拓也会員、山田しよう氏の合計4名が参加し、合わせて口頭発表3本（佐野、山岡、岩瀬）、ポスター発表2本（山田、岩瀬）の発表を行った。ここでは会議の概要と幾つかの発表を紹介する。

会議はファーロにあるアルガルヴェ大学（Universidade do Algarve）のギャンベラキャンパス（Campus de Gambelas）にて行われた。オーガナイザーはアルガルヴェ大学のNuno Ferreira BichoとJoão Marreiros、スペイン国立学術会議（Consejo Superior de Investigaciones Científicas (CSIC) : Spanish National Research Council）のJuan Gibaja Baoである。ファーロは首都リスボンから飛行機で2時間ほどの距離にあり、ポルトガルの南端に位置する。地中海から大西洋への出口に面する都市で、砂浜やヨットハーバーのあるリゾート地である。比較的温暖で物価も高くなく魚介料理のおいしい、過ごし易い都市である。

誌上では81本の口頭発表と45本のポスター発表が登録されていたものの、このうち10数本の発表

は当日にキャンセルされていた。誌上登録をみるとアジアからは日本、フィリピン、北米からはアメリカ、カナダ、南米からはアルゼンチン、ブラジル、欧州からはアイルランド、イギリス、イタリア、オランダ、スペイン、ギリシャ、スウェーデン、ドイツ、チェコ、ノルウェイ、フランス、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、ルーマニア、ロシア、中東からはイスラエル、そしてオーストラリアの大学、研究施設に所属する研究者が登録していた。当日の会議ではスタッフなどを含め90人以上の研究者が参加し、やはりアメリカ大陸やアジアからの参加者は少なく、フランスやスペイン、オランダなどの西ヨーロッパからの参加者が多くを占めていたようである。これまで1990年のリエージュおよび2005年のヴェローナでの使用痕会議の参加記が報告され（山田1991, 2005）、アメリカ大陸やアジア、東ヨーロッパからの参加者が少ないと紹介されている。今回の会議でも同じ傾向であったようである。また2005年の使用痕会議の参加記（山田2005）も報告しているが、今回の会議においても若い研究者がとても多く、博士論文やそれに関わる研究の一部を報告している例が目にとまることが多かった。

今回の会議では事前にセッションは組まれておらず、投稿された口頭発表の内容に基づいてオーガナイザーが、セッション1：方法（パートI）、セッション2：狩猟採集民（パートI）、セッション3：刺突、セッション4：方法（パートII）、セッション5：狩猟採集民（パートII）、セッション6：骨の技術、セッション7：新しい技術、セッション8：狩猟採集民（パートIII）、セッション9：初期農耕民、セッション10：後期新石器・青銅器時代、の10のセッションを組んでいた。セッションの数からみても分かるように、狩猟採集民に関する報告



写真1 アルガルヴェ大学

が最も多く、意外であったのが、農耕に関わる報告が少なかった点である。近年の日本でもそうであるように、これまで使用痕分析の主な対象であった農耕に関わる研究だけでなく、相対的に分析例の少なかった狩猟採集民や、より古い時代の資料を対象とした分析が増えつつあるようである。

この中でも筆者の興味を引いた点は着柄痕に関する報告の多さである。1980年代以降、着柄痕に関する研究はやや悲観視されていたものの、Rots (2003, 2010など) が、それまでの着柄痕に関する研究は体系的な実験による裏付けを欠いていたと批判し、その再評価に着手した。会議での報告の多さは、Rotsによる実験研究に刺激を受けて、改めて着柄痕の可能性と重要性が見直されつつあることを示している。Rots自身も北西ヨーロッパ各地の中部旧石器時代から前期上部旧石器時代にかけての遺跡資料を扱い、個々の石器の形態や使用方法、被加工物、遺跡の機能と着柄の関連性について発表した。その結果によれば、ネアンデルタールの段階ですでに着柄技術は認められ、また着柄された石器は刺突に関わらず、動物の解体や木工作業など幅広い作業に用いられていた可能性が指摘された。この他にも多くの研究者が、各地・各時代の資料から着柄痕と考えられる痕跡を数多く報告していた。しかしかつて Cahen et al. (1979: 681) が指摘したように、着柄痕と呼びうる排他的で明瞭な痕跡があるわけではなく、むしろ使用痕としては説明しにくく、かつ柄との微妙な接触によって形成されたと推定される光沢面や輝斑、微小剥離痕などの痕跡が着柄痕として解釈される。こうした着柄痕の認定に関する課題を踏まえると、現在の着柄痕研究の段階は、可能性のある痕跡を列举する時期にあるといえる。そしてこれまでの使用痕光沢面研究の流れと同様に、そ



写真2 会議風景 (会議オーガナイザー提供)



写真3 ポスターセッション風景 (会議オーガナイザー提供)

した事例分析がある程度蓄積された後に、着柄痕の認定に関する基礎的な研究が改めて要請され、Rotsと同様な体系的実験が複数の研究者によって実施されるようになると予測できる。

また会議の中で比較的まとまりの良いセッションは、セッション3：刺突であった。誌上では9つの発表が登録されていたが、このうち8つが発表された。これらの発表では複数の発表者が刺突実験とその結果を報告した。異なる条件の実験が同一の場で発表されたことで、例えば刺突によって生じる衝撃剥離痕の形態や部位が、対象物に接触する時の角度 (Iovita, R) や速度 (Sano, K) 、対象物の硬軟 (Yamaoka, T) 、着柄方法 (Lammers-Keijser, Y) などによって多様に変化しうることが示された。衝撃剥離痕の形成に関与する複数の条件が示され、考古資料に観察される衝撃剥離痕のパターンからどのような情報を引き出しうるのか、大まかな見通しが得られつつある印象を受けた。

3日間にわたる会議は朝8:30から始まり、夜19:00頃まで行われた。また会議の後は、研究者同士連れだって町へ下り、深夜2:00頃までワインやビールを片手に、それぞれの研究や就職、自国の文化など様々な話題について盛り上がっていた。ベテランの使用痕研究者だけでなく、年齢の若い研究者が数多く参加し、多くの刺激を受けることができたのは筆者にとって幸運であった。

最後に次回の会議が2015年にオランダのライデン大学で開催されることが決定し、3日間に渡るフアーロでの使用痕会議が閉幕した。

なお会議の予稿集はインターネット上で無料でダウンロードできるので、興味のある方は <http://usewear2012.com/> をご覧ください。

引用文献

Cahen, D., Keeley, L.H. and Vannoten, F.L.(1979) Stone

- tools, toolkits, and human-behavior in prehistory.
Current Anthropology, 20(4), 661-683.
- Rots, V. (2003) Towards an understanding of hafting: the macro-and microscopic evidence. Antiquity, 77, pp. 805-815.
- Rots, V. (2010) Prehension and Hafting Traces on Flint Tools. Leuven University Press, 273p.
- 山田 しょう (1991) '90年リエージュ「使用痕」会議に参加して. 旧石器考古学, 43, pp.51-58
- 山田 しょう (2005) Weartraces 2005 “『先史時代のテクノロジー』40年後：機能研究とロシアの遺産”に参加して. News letter of use-wear analysis, 2, pp.1-3

日本旧石器学会研究グループ 2012年度活動報告

以下は、日本旧石器学会からの助成に基づき、2 グループが実施した 2012 年度研究活動の報告です。

1 沖縄更新世人類研究グループ

今年度（2012 年 4 月～2013 年 3 月）は、以下のようないくつかの活動を実施しましたので、報告いたします。

①沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の更新世人骨と石器の報告（2012 年 10 月）

サキタリ洞遺跡の更新世末（約 12000BP）の堆積層（I 層）から出土した石英製石器 3 点と、人骨（ヒト右上顎乳犬歯）1 点について以下の 2 本のレポートを発表した。

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・国木田 大・松浦秀治・諫訪 元・大城逸朗（2012）「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査（2009～2011 年）－沖縄諸島における新たな更新世人類遺跡－」『Anthropological Science (Japanese Series)』120: 121-134 頁
山崎真治・西秋良宏・赤嶺信哉・片桐千亜紀・仲里健・大城逸朗（2012）「サキタリ洞の後期更新世堆積層中より出土した石英標本に関する考古学的研究」『日本考古学』34: 71-85 頁

サキタリ洞遺跡では、これまでの調査によって表土、FS 層、I 層、II 層、III 層の 5 枚の堆積層が識別されています。このうち FS 層は固結化した厚さ約 30cm のフローストーン（鍾乳石）の層で、縄文時代の遺物（土器、石器、獸骨等）を含む。I～III 層は褐色の粘質土からなるが、II 層には炭化物が多量に含まれているため、一見して黒色を呈している。II 層は炭化物の密度によって



写真 1 サキタリ洞遺跡東側開口部



写真 2 調査区 I 西壁セクション
(黒く見える部分が II 層、その上が I 層)



写真 3 I 層石英製石器（剥片）の産状



写真 4 I 層ヒト歯（右上顎乳犬歯）の産状

II-1A、II-1B、II-1C、II-2 に細分される。I 層ではおよそ 12000BP、II 層では 16000～19000BP、III 層では 24000～32000BP の放射性炭素年代値が得られている。2009 年に設定した試掘坑（1m × 2m）において、地表下

約2.5mまで掘削を行っているが、まだ洞床には到達していない。I～III層には多量のカタツムリ、カニの爪、カワニナが含まれており、特にII層での分布は濃密である。また、石英製石器と人骨は、I層上部から獸骨（イノシシ骨）や海産貝などとともに出土した。I層中から出土した獸骨、海産貝、カタツムリ、カニの爪、カワニナ等については、現在食料残滓の可能性を検討中である。

②沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査（2012年8～10月、2013年2～3月）

昨年度に引き続いてサキタリ洞遺跡の発掘調査を実施し、調査区Iでは第II層（16000～19000BP）をほぼ完掘した。また西側洞口外に調査区IIIを設定し、調査区Iとほぼ同様の後期更新世堆積物が洞口外にも広がっていることを確認した。

③沖縄県石垣市白保竿根田原洞穴遺跡の調査研究（2013年1～3月）

沖縄県立埋蔵文化財センターによって内容確認のための発掘調査が実施されている白保竿根田原洞穴遺跡の調査研究を行った。前回（2010年度）調査に引き続いて、後期更新世の堆積層から人骨等が産出することを確認し、遺跡の堆積環境等について検討を行った。

④東京都八丈島における島嶼考古学的調査（2013年1月）

東京都八丈島において、先史遺跡の現地調査、資料調査を実施した。その成果に基づいて、資源に乏しい島嶼環境への先史人の適応プロセスについて、沖縄との比較研究を実施中である。 (1: 山崎真治)

2 南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ

①南アジア旧石器時代遺跡データベースの整備

2012年度はパキスタンを中心に既公表データの収集、整理を進めた。

②パキスタン、ヴィーサル・ヴァレー地区遺跡群の発掘調査（2012年9月）

中期～後期旧石器時代石器群の採集地点の年代、地形発達史解明のための発掘調査を、パキスタン・シャー・アブドゥル・ラティーフ大学（SALU）考古学研究室と共同で実施した。現在、分析を実施中である。発掘調査は2013年度も継続実施を予定。

③インド、ジュワラプーラム遺跡群の現地調査（2013年1月）

新期トバ・タフ（YTT）の上下から、中期～後期旧石器時代石器群が発掘された当該遺跡群における地形・

地質調査、および周辺資料調査を、インド・カルナタカ大学、マハラージャ・サヤジラオ大学、ハイデラバード大学の研究者と共同で実施した。

④石器群の画像・3D計測データ・アーカイヴの整備

東海大学近藤研究室のご協力により、同大学所蔵丸山コレクションの前期～中期旧石器時代資料の高精細デジタル画像作成、3D計測モデルの試作を行ない、デジタル・アーカイヴの構築と公開方法の検討を進めた。

⑤成果の普及・公開

1) 学会・研究会等発表

- ・26th European Association for South Asian Archaeology and Arts (2012年7月2日～5日：フランス・パリ) : A. Noguchi, G. M. Veesar, Q. H. Mallah, N. Shaikh, H. Kondo — Recent Research on Paleolithic sites in Thar Desert of Sindh, Pakistan and its implication for Modern Human Dispersal to South Asia

- ・SALU教員・学生向け講義（2012年9月28日）

- ・石器文化研究会第259回例会（2013年2月16日）：野口 淳「アウト・オブ・アフリカII—南回りルートを追跡する—」

- ・第37回フィッショントラック研究会 共通テーマセッション「考古学との連携」（2013年2月24日）：下岡順直「古文化財科学（考古学）におけるルミネッセンス年代測定法の利用」

- ・第20回西アジア発掘調査報告会（2013年3月23～24日）：野口淳・下岡順直・G.M. ヴィーサル・Q.H. マッラー・N. シエイフ・近藤英夫「パキスタン南部タール砂漠の旧石器時代遺跡—ヴィーサル・ヴァレー地区2012年調査—」

以下、予定：インド考古研究会例会（2013年4月2日）、British Academy workshop “Out of Africa, Into South Asia”（2013年4月16～17日：イギリス・オックスフォード）、シンポジウム「イランの旧石器：Palaeolithic of Iran」（2013年4月21日）、国際会議“New Horizons through novel discoveries in Indus civilization”（2013年10月：パキスタン・ハイルブル、‘Archaeology of Stone Age’ sessionを共催）。

2) 刊行物等

- ・Y. Shitaoka, H. Maemoku, T. Nagatomo — Quartz OSL dating of sand dunes in Ghaggar basin, northwestern India. Geochronometria, 39: 221-226, 2012

- ・H Maemoku, Y. Shitaoka, T. Nagatomo, H. Yagi: Geomorphological Constraints on the Ghaggar River Regime during the Mature Harappan Period. in L. Giosan et al.

(eds.) *Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophysical Monograph Series*, vol. 198, AGU, pp.97-106, 2012

・野口 淳「南アジアの中期／後期旧石器時代」『ホモ・サピエンスと旧人』西秋良広編、六一書房、95-113 頁、2013

3) ウェブページ等

下記のウェブサイト、ブログを開設して情報の公開を進めている。今後、本研究グループに関するページに、遺跡データベース、石器群アーカイヴを公開する予定。

・ヴィーサル・ヴァレー・プロジェクト（日本語版）

ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/veesarvalley/>

ブログ：<http://veesarvalleyjp.blogspot.com/>

南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ 2012 年度メンバー：野口 淳（代表者）下岡順直、横山 真、藤波

啓容（以上、分担者）、千葉 史、近藤英夫（以上、協力者）

（2：野口 淳）

2013 年度総会・基調講演・一般研究発表・シンポジウム開催要項・プログラムのご案内

下記の通り 2013 年度日本旧石器学会第 11 回大会についてご案内いたします。一般発表（口頭・ポスター発表）の詳細については、後日、学会ホームページにてお知らせいたします。

日本旧石器学会第 11 回大会

会場：東海大学湘南キャンパス 11 号館 11-206 教室（神奈川県平塚市北金目 4-1-1）

日程：2013 年 6 月 15 日（土）～16 日（日）

・6 月 15 日

総会 （13:00～14:00）

基調講演 工藤雄一郎「旧石器時代の年代と広域編年対比（仮題）」（14:15～15:15）

一般発表 7 本の口頭発表を予定（15:30～17:40）

懇親会（14 号館 Cafe Lounge 14 を予定）

・6 月 16 日

シンポジウム（10:00～15:30）テーマ「旧石器時代の年代と広域編年対比」

1 諏訪間順「趣旨説明」

2 吉川耕太郎・直江康雄「北海道・東北」

3 中村雄紀「関東」

4 阿部 敬「中部」

5 三好元樹「近畿・中四国」

5 鎌田洋昭「九州・沖縄」

コメント・パネルディスカッション

ポスター発表

会場：東海大学湘南キャンパス 11 号館 11-206 教室

室前フロア

日程：6 月 15 日（土）～6 月 16 日（日）

※コアタイムは 16 日 12:00～13:30

会場案内：小田急線「東海大学前」駅下車徒歩約 15 分。

11 号館はキャンパス北東隅の建物です。東海大学のホームページを参考にしてください。

http://www.u-tokai.ac.jp/info/traffic_map/shared/pdf/shonan_campus.pdf

<http://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/shonan/index.html>

駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。

宿泊：各自でご手配下さい。小田急線本厚木駅周辺の宿泊が便利です。

参加申込み：同封の葉書に必要事項を記入の上、6 月 4 日（投函）までに事務局までお申し込み下さい。また、やむを得ず欠席される場合は、会則第 5 条により、欠席の委任状を含め全会員の 5 分の 1 以上の出席をもって総会が成立しますので、同葉書下段に記載された委任状に記入、押印のうえ投函願います。

第 38 回九州旧石器文化研究会佐賀大会

「九州における A T 降灰前後の石器群—断絶か継続か、地蔵平遺跡の調査成果から—」開催報告

第 38 回九州旧石器文化研究会は、2012 年 11 月 10 日（土）・11 日（日）の両日、佐賀県佐賀市の富士生涯学習センター・フォレスターふじを会場に開催された。

南九州の姶良火山の噴火は、当時の自然環境に壊滅的打撃を与え、人類文化にも大きな影響があったことが、考古学や自然科学の研究成果によって明らかにされている。本会では、これまで姶良 Tn 火山灰（A T）と石器群の関係について幾度か議論してきた。その研究の中心となってきたのは、入戸火碎流に覆われた薩摩半島や宮崎平野、A T との層位的関係が明白な大野川流域等、南九州や東九州の石器群である。しかし近年、嘉瀬川ダム建設によって発掘調査が行われた佐賀県佐賀市の地蔵平遺跡では、A T の一次堆積層を挟んで石器群が層位的に検出された。この西北九州の調査成果によって、九州全域における A T と石器群の関係が議論される基盤が整ったと言える。今回の研究会では、地蔵平遺跡の調査成果を手懸りに、新資料が蓄積され

ている九州各地のAT降灰前後の石器群を比較検討し、その動向を探ることを目的とした。

内容は以下のとおりである。

2012年11月10日（土）13:30～17:00

記念講演「上場台地の旧石器時代遺跡発掘調査の歩み」田島龍太（唐津市末盧館）

基調報告

1) 「佐賀県地蔵平遺跡の調査」白木原 宜（佐賀県教育委員会）

2) 「九州地方における始良Tn火山灰（AT）の層相—佐賀市地蔵平遺跡など考古遺跡を中心として—」早田 勉（火山灰考古学研究所）

資料見学会（地蔵平遺跡出土旧石器資料）

11月11日（日）9:00～12:00

研究発表「AT降灰前後の石器群の地域的様相」

1) 「入戸火碎流前後の人類行動と九州南部の石器群」

藤木 聰（宮崎県立西都原考古博物館）

2) 「九州におけるAT降灰前後の石器群：中九州地域の様相」岩谷史記（熊本市文化振興課）

3) 「AT降灰前後の石器群—東九州の様相—」

荻 幸二（中津市教育委員会）

4) 「西北九州におけるAT降灰前後の石器群」

杉原敏之（九州歴史資料館）

討論「断絶か継続か—九州におけるAT降灰前後の石器群—」司会 鎌田洋昭（指宿市教育委員会）・松本 茂（宮崎県埋蔵文化財センター）

1日目は、記念講演と基調報告、資料見学会を行った。

記念講演は、2012年3月に唐津市を退職された田島龍太氏にお願いした。唐津上場台地における今までの旧石器研究の歩みを自身の研究活動と重ねながら、貴重な記録と共に振り返っていただいた。

基調報告は、白木原宜氏に地蔵平遺跡の調査成果を、始良Tn火山灰研究の現状を早田勉氏にお願いした。白木原氏は、地蔵平遺跡の良好な土層堆積状況や石器群の出土状況を画像で解説された。また早田氏は、地蔵平遺跡を中心とするATの堆積様式をどのように理解できるのか、考古遺跡における一次堆積層とそれ以外の検出テフラの取扱いに注意を払う必要性や、災害状況としての石器群を見極める重要性を説かれた。

2日目は九州各地の事例が報告され、それを基にして討論を実施した。

南九州の藤木聰氏は、宮崎平野におけるAT下位から一部石器群の継続性を認め、石材利用の変化や火碎流に覆われた地域における新器種の登場から石器群の



写真1 基調報告（早田 勉氏）



写真2 資料見学会

構造変化を捉えようとした。中九州の岩谷史記氏は、AT降灰以前から以後への石器群の変化は緩やかで断絶なく継続するとし、さらに東九州の荻幸二氏は降灰後も二側縁加工ナイフ形石器が継続し、新たに狸谷型ナイフ形石器が出現する時期を重視した。西北九州の杉原敏之氏は、AT上下で石器群が漸移的な構造変化をみせつつも継続し、大型尖頭器定着後に大きな画期があるとした。

討論は鎌田洋昭・松本茂の両氏による司会、地域様相を発表した4名と早田氏によって進められた。AT降灰前の時期、各地における石器群の変化の有無とその画期をどのように捉えるのかが論点となった。壊滅的な状況の中で一部の地域で継続する南九州の石器群に対して、西北九州の石器群との構造的違いはあるのか、各地の石器群を抽出して比較したが、それぞれの構造を対比するまでに至っていない。そのため、討論ではAT降灰後の新器種の出現期をどのように理解するかに絞られていった。結果として、西北九州では石刃製ナイフ形石器の継続の上に剥片尖頭器が出現することや、南九州における狸谷型ナイフ形石器や剥片尖頭器の出現は、入戸火碎流の被災状況を踏まえた中で初めて見えてくることが確認された。そして、当該期

石器群については、あらためて器種組成や型式変化を踏まえた上での議論が重要であることが共通理解となつた。本会の詳しい内容については、予稿集でもある『九州旧石器』16号を参照されたい。

なお、次回の第39回九州旧石器文化研究会は、宮崎県で実施する予定である。

(杉原敏之)

岩宿フォーラム2012／シンポジウム 「北関東地方の細石器文化」開催報告

2012年11月3日（土）・4日（日）に群馬県笠懸公民館1階交流ホールにおいて、第21回岩宿文化賞（学生部門）授賞式及び受賞者フォーラムが行われ、続いて岩宿フォーラムシンポジウムが開催された。今回はハケ入遺跡などの群馬県内で細石器文化新資料が加わり、北関東地域の細石器文化を再検討を行うことで、細石器文化研究や集団の移動や交流について検討することを目的に議論された。

第I部基調講演では「北方系細石刃石器群の研究」と題し、橋本勝雄氏が研究の課題を整理しながら関東地方の全般的な北方系細石刃石器群の変遷について講演した。

第II部基調報告では前半は北関東、後半は自然環境、周辺地域と報告の幅を広げて、話題提供を行った。まず、「北関東細石器研究グループの活動」で阿久沢智和氏が北関東の細石器文化研究史と北関東細石器研究グループが発掘調査を実施した「大雄院前遺跡」「鳥取福蔵寺II遺跡」の成果について、組成、石器群の特徴について報告した。「楕形系細石器文化の石器群」では萩谷千明氏が従前主張してきた「構造III」「構成III」「類型III」（萩谷1994、2003、2007）を基軸に舟底形石器・搔器・削器等で構成される非削片系細石刃石器群を関東地域の地域性を念頭に「楕形系細石刃石器群」として、在地系石材への展開とその様相について報告した。また、「荒屋系細石刃文化の石器群－北関東地域の様相」では軽部達也氏が、削片系細石刃石器群の製作システムと荒屋型彫刻刀、硬質頁岩卓越などを踏まえて、北関東地域の様相を報告、東北、新潟、群馬から旧利根川流域を南下する集団回帰遊動について報告した。

「山形県湯の花遺跡・群馬県稻荷山V遺跡資料の产地分析」で、建石徹氏が今回の岩宿フォーラムで行った分析で、北海道白滝産黒曜石が本州遺跡資料で初め

て確認されたという、今後の石材流通、集団移動論に一石を投じる重要発見が報告された。

第III部基調報告では秦昭繁氏が「東北地方南部の珪質頁岩産地と石材の特徴」で、東北南部の珪質頁岩の分布とその遺跡での利用について報告。「細石刃文化期の自然環境」で、佐々木由香氏が自然科学分野での研究成果を紹介、細石刃文化期の気候変動と植生変化について報告した。

第IV部基調報告では周辺地域の様相として3報告が行われた。「東北地方の細石刃文化」では川口潤氏が削片系、舟底系、稜柱系の細石刃石器群の分布と石器石材の様相について報告。「北陸地方北部の北方系細石刃文化」では吉井雅勇氏が新潟県域を中心に北方系細石刃石器群の遺跡での組成様相を報告。特に札滑、白滝など削片系とホロカなど非削片系の遺跡内における様相が注目された。「周辺地域の様相－関東地方南部」で永塚俊司氏が南関東荒屋系細石刃石器群の分布と様相について報告。石材窮乏地域における在地系石材利用と尖頭器石器群の接点について課題を示した。

第V部基調報告では山科哲氏が「技法、技術構造、その運用」として、北方系細石刃石器群研究の流れを整理し、ホロカ型細石刃石器群の評価を通じて、荒屋系細石刃石器群の時空的展開について報告した。一方、須藤隆司氏は「赤城山麓を遊動する細石刃狩猟民」と題し、関東地域の各細石核型における細石刃狩猟民の遊動を石器製作技術、石材とシカの生態系との関連性を視点に細石刃石器群の変遷と領域について報告した。

パネルディスカッションでは、大工原豊、小菅将夫両氏の司会で、群馬県域の細石刃石器群の集団のあり方について議論が進められ、「楕形系」の定義に対しての異論が指摘され、札滑型との関連における白滝型細石刃核の認識定義や新潟県域の様相と関東地域の様相の相違など、また、シカの生態と群の遊動と集団の関係など多岐にわたる課題が論点、話題となった。

(軽部達也)



写真 シンポジウム風景

岩宿博物館開館20周年記念／東国文化周知事業
シンポジウム「岩宿遺跡とその時代」
開催報告

2013年3月10日（日）に群馬県笠懸公民館1階交流ホールにおいて一般参加者向けに岩宿時代の最先端の研究を解説しながら群馬県の遺跡や様相、社会などを討議するシンポジウムを開催した。今回、岩宿博物館開館20周年にあたり、6講演とパネルディスカッションの構成で、岩宿遺跡の発見の意義、群馬県の特徴を岩宿フォーラムのスタートした原点に立ち返るような総括的な内容となった。

講演1では小菅将夫氏（岩宿博物館館長）が「歴史の原点－岩宿遺跡とその発見」で相沢忠洋氏の岩宿発見に至る経過や業績、岩宿遺跡発見の意義について語った。講演2では早田勉氏（火山灰考古学研究所）が「岩宿時代遺跡の年代を調べる方法」でテフラとは何かと時代時期の指標や古環境との関わりを解説した。講演3では須藤隆司氏（佐久市教委）が群馬県における3万年前後の社会について、下触牛伏遺跡を中心として環状集落の成因に触れ、小集団集結とそこでの活動について石器石材の動きや接合、ナウマンゾウなど大型獣との関連仮説を交えて語った。続く講演4では大工原豊氏（國學院大学講師）が石器石材の動きを中心に須藤氏と同様に下触牛伏遺跡などを例に群馬県の特徴である黒色安山岩や貞岩の石器製作消費行動と遺跡との関連、黒曜石の獲得と集団の活動領域について解説した。

講演5では安蒜政雄氏（明治大学教授）が槍先形尖頭器や石槍の用語について解説しながら、武井遺跡のような大規模石器製作遺跡のあり方と槍先形尖頭器文化期の岩宿時代社会の変化について語った。講演6では堤隆氏（浅間縄文ミュージアム）が「時代が変わる一細石刃文化から西鹿田中島遺跡の土器出現まで」と題して、岩宿時代から縄文時代へ移り変わる時空間において、道具の変遷と気候変動、動物相の変化などを解説した。

パネルディスカッションでは軽部達也（藤岡市教委）の司会で、各講演者らが岩宿遺跡発見から広がった岩宿時代研究と岩宿時代の変遷、石器石材研究の成果について各講演内容に触れながら議論を展開、岩宿時代の社会を一般参加者の理解を深めた。最後に安蒜氏が総括しながら、研究史上の発見と岩宿時代変遷の偶然



写真 シンポジウム風景

性を捕らえながら、岩宿フォーラムの今後の展開に期待を寄せて閉幕した。
(軽部達也)

おしらせ

会費納入のお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいております。同封の払込取扱票を用いて、2013年度分の会費の納入をお願いいたします。また2012年度以前の会費を未納の方々につきましては、該当年度分の会費をも納入いただきますよう、お願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

事務局の移転について

総務委員の静岡大学への赴任に伴い、事務局を静岡大学人文社会科学部に移動します。つきまして、今後事務局に連絡する際は、奥付にあります住所までお願いいたします。

日本旧石器学会ニュースレター

第23号

2013年5月1日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

谷 和隆・沖 憲明・高倉 純

発行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也
研究室

E-mail jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

HP http://palaeolithic.jp/index.htm